



事務員から義肢装具職人の道へ

紛争を乗り越えたルワンダで、 20年以上義肢を作り続けて ルダシングワ真美

義肢装具士

構成◎古川美穂

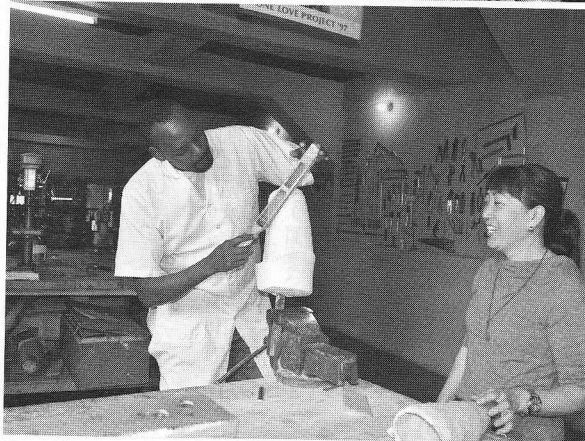
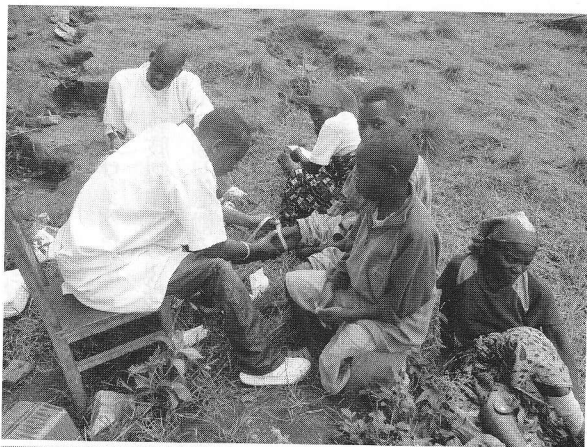
撮影◎本社写真部(P130)



1 994年、アフリカのルワンダで起きた大虐殺。ツチ族とフツ族の民族衝突を背景に、約100日間続いた大虐殺では、多くの命が奪われた。この悲劇や病気などで手足に障害を負った人々のため、義肢装具を作り続けている日本人女性がいる。きっかけは、ルワンダ人の夫・ガテラさんとの出会いだった――

始まりは短期留学から

久しぶりに日本へ帰ってきましたが、なんだか落ち着きません。私にとって、ルワンダにいることのほうが当たり前になっているみたいです。でも実は、ルワンダと



上／義肢製作のため、メジャーで患部の採寸を行う 下／石膏を使って患部の型を作る。ヤスリでいいねいに削って形を整えているところ

の縁は、「現実逃避」から始まりました。

バブル絶頂期に法律事務所就職したものの、20代半ばになると事務員としてひたすら書類をタイプする毎日に、焦りを感じるようになりまし。もっと人と繋がれるような仕事したい。この日本から逃げ出したいと、悶々としていたのです。そんなある日、書店で東アフリカのガイドブックを手に取り、「ケニアでスワヒリ語を学ぼう！」という広告を見て留学を思いつきました。

そうして会社を辞めて行った留

学先のケニアで、ルワンダ人のガ

テラに出会います。当時アフリカでは、日本人女性というだけでチャホヤされ、「結婚しよう！」と迫ってくる男性も多かったんです。でも、ガテラは違いました。いつも毅然としていて、一人の人間として私に向き合ってくれる。「どこか気になる人」として心に残りました。

帰国後、手紙を出してみたら返事がきて、嬉しかった。ところが、同封されていた写真を見ると、彼の自慢のドレッドヘアがなくなっ

さらに手紙で尋ねると、想像もしていなかった返信が。

90年当時、ガテラの故郷ルワンダは、ツチ族とフツ族の民族対立が高まって治安が悪化。ツチ族である彼は隣国に避難していたそうです。ある日、ヨーロッパでの行商の仕事帰りにルワンダで飛行機を乗り継いだ際、「ツチ族の男がいる」と引きずりおろされ、ひどい暴行を受けたのだと。ドレッドヘアはそのとき引きちぎられた、という話でした。

私を知っていたのはアフリカのほんの一面だけだったんだ……と

思い知らされました。飢餓問題や貧困のことは知ってはいたものの、民族紛争にまで関心を払っていなかった。彼の手紙で初めて、闇の部分を知えられたのです。同時に、ルワンダとガテラのことをもっと知りたい、と思うようになりました。それから半年ほど文通を続け、私は再びガテラがいるケニアへ旅立ちます。そこでお互いの気持

ちを確かめ、私は帰国。遠距離恋愛を続け、91年、ガテラは初めて日本を訪れました。父に紹介したところ、最初は当惑していましたが、その後は打ち解けたようでした。

義肢装具士を目指して

ガテラは子どものころ罹ったマラリアの治療ミスがもとで右足にマヒがあり、常に装具と杖が必要な状態でした。ところが日本滞在中に、装具が壊れてしまった。お医者さんに相談すると、「修理するよりも新しく作ったほうが経済的」と言われ、神奈川県横浜市にある平井義肢製作所で型を取ってもらいました。

作業工程を見ていたガテラが技術の高さに驚き、「この技術をルワンダに持って帰り、自分と同じように障害を持つ人たちのために役立てたい」と言ったんです。同時に私も、「勉強すれば、彼の装具が壊れたときに自分で作ってあげられる」と思いました。理由は違っても、目的が一致したわけです。ルワンダには、紛争や病気が原因で手足に障害のある人がたくさ

んいます。彼らのことをガテラは考えていたのです。

ガテラがルワンダに戻った後、私は平井義肢製作所の親方・平井貞夫さんのもとで働くことにしました。義肢装具士は国家資格で、学校に通うと資格を取るまで約3年かかりますし、お金もかかる。なので通学は諦め、お金を稼ぎながら勉強できればと「弟子入り」を選んだのですが、始めてみるとすごく面白い。それまで私は事務仕事をそつなくこなし、上司に叱られたこともありませんでした。ところが職人の世界では、失敗すれば容赦なく叱り飛ばされます。それが逆に新鮮でした。

親方からはさまざまなことを学びました。あるとき私がちよっと手抜きをしたら、すぐ見破られた。「おめえ、最後の仕上げをちゃんとかやらないやダメじゃないか。こういうのをケジメというんだぞ」と。初めて「ケジメ」の本当の意味を知りました。

毎日懸命に親方の仕事を見習いながら、時給400円ほどのお給料をコツコツ貯める。義肢装具士の資格も取れ、「ルワンダに行つてガ

テラと暮らす」という夢に向かって充実した毎日でした。ところが94年4月、突然ガテラと連絡が取れなくなってしまう。

町には大虐殺の爪痕が

ルワンダという国は、1922年から62年までベルギーの植民地でした。ベルギーはルワンダの人々をツチ族とフツ族、トワ族に分けて待遇に差をつけ、互いの敵意を煽ることで、宗主国への不満を逸らすよう仕向けました。そうして募っていた憎しみが爆発したのが、94年の「ルワンダ大虐殺」です。ツチ族とフツ族が殺し合い、わずか3カ月で80万〜100万人の命が奪われました。家族や親戚が全員殺されたり、遺体が見つからなかったりしたため、実際の犠牲者数は今でもわかっていません。

虐殺の報道をテレビで見ながら、「ガテラは殺されてしまったかもしれない」と思ったこともありましたが、でも、連絡を取る余裕がな

いだけかも……。祈るようにして待ち、3カ月後、ようやく彼から電話がきたときには、安堵のあまり崩れ落ちそうになりました。彼は虐殺の終了したルワンダに帰っており、「早くこちらに来て、この現状を見てくれ」と。

95年6月、私はルワンダへ渡りました。一見すると、町には日常が戻っていた。でも、外からはわからない人々の心の傷が、あちこちに存在していました。ルワンダではほぼすべての人が、被害か加害、何らかの形で虐殺に関わっています。町中では、自分の家族を殺された人が、加害者と呼ばったり出くわすことも。被害者が叫び声を上げると、たちまち人垣ができ、加害者を警察に連れて行く——そんな光景をたびたび目にしました。

また、ガテラが私に見せたいと言った場所がありました。5000人のツチ族が虐殺された教会です。事件を風化させないため、現

場は当時の状態で保存されていた。教会の中には多くの遺体が残されており、すさまじい腐臭がする。壁を見ると、赤ちゃんを叩きつけて殺したという血の跡がある。それらを見たときに、正直、「この中に彼がいなくてよかった」と思いました。同時に、そこで殺された人がいるにもかかわらず、ガテラが無事であることだけを考えてしまった自分が恥ずかしかったです。

ルワンダでは、殺し合いをした人たちが、今も同じ場所で暮らしています。恨みを持ち続けている人もいますが、憎しみの連鎖に疲れてしまった人も多い。政府も、新しい国を作り直すためには虐殺という過去から抜け出さなければいけない、と考えていました。

ガテラがよく言うのですが、「人間は、忘れてしまおうと同じことを繰り返す。自分たちが語らなければ、子どもたちが再び武器を持ってしまう」。あの出来事を忘れず、過ちを繰り返さないようにしようという思いは国全体で共有されており、毎年4月には各地で追悼式が行われています。

義肢を販売できたらベストですが、必要としている人はお金がありません

念願の製作所をオープン

私たちの活動は、96年に「ムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」としてルワンダ政府よりNGOの承認を受けました。

翌97年には、ガテラが政府に掛け合い、バーだった建物を借り受けて義肢製作所を開設。義肢装具士は私のほか、彼が見つけてきた2人の計3人です。日本にいたときは親方の最終チェックを受けて修正できたけれど、ルワンダでは自分でゴーサインを出さないといけない。それがプレッシャーでした。

商売として義肢を販売できたならばベストなのですが、必要としている人のほとんどは、お金に余裕がありません。そこで無償で配る体制を作るため、寄付集めや助成金申し込みなどに奔走し、資金を作りました。以来、約20年間で延べ1万1000人分の義肢や杖を配っています。

患者さんの反応はさまざまです。喜んでくれる人が多いものの、「いいらない」と言われたこともあり、何が入らないのか聞くと、「格好悪い」と。私も最初は考え



るだしんぐわ まみ 1963年神奈川県生まれ。89年ケニアに語学留学し、のちに夫となるガテラさんと出会う。92年、平井義肢製作所で義肢製作を学び、義肢装具士の資格を取得。97年にルワンダの首都・キガリに製作所を設立し、手足に障害がある人々に義肢装具を提供し続けている。NGO「ムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」の代表として、2018年度の読売国際協力賞を受賞。写真左は夫のガテラさん

違いをしていて、「ただであげるんだから、多少格好悪くてもいいじゃない」という気持ちがあった。でも、自分が欲しくない服をもらって嬉しくないのと同じですよね。また、義肢を作ってもらっている最中は嬉しそうだったのに、結局は使わず、道端で物乞いをしている人も。義肢があるとお金を恵んでももらえないと言います。それにそれに事情があり、必ずしも喜んでもらえるとは限らない、と活動を続けるうちに知りました。

その後、ルワンダや日本のメデ

イアで紹介されたことで寄付が集まるようになり、活動の規模が大きくなりました。職業訓練所、ゲストハウスなども自分たちの手で作り上げて、その収益も義肢作りに回せるように。なんとか軌道に乗ったかと思っていたら……昨年のクリスマスに大雨が降って洪水が発生し、工房の大部分が浸水してしまいました。そのうえ、「ここは湿地帯で危険だから立ち退け」と、政府から追い出されたんです。レンガを焼くところから作り上げてきた建物が、一瞬にして

ブルドーザーで壊されました。強引なやり口で立ち退かされてしまったことが、とても残念です。さすがにガテラも落ち込んでいましたが、今は辛抱のしどき。これまでのように作業を再開するために、2人で力を合わせていくだけです。

私ももう50代後半ですし、ガテラは97年上。ときどきふと、彼が先に逝ってしまったら、私はどうしようかと考えることもありま。元氣なうちは、ルワンダと日本を行き来して仕事を続けるでしょう。でも無理がきかなくなったら、日本に戻って資金集めなどの手助けに専念するかもしれません。結局のところ、私がルワンダに続ける理由は、彼がいるからなんです。

今、ルワンダでも新型コロナウイルスの感染者が出ており、欧米のような状態になってしまっている。飛行機も果たして飛ぶかどうかかわりませんが、今はただ早くルワンダに戻り、新しい義肢製作所を建てて、製作を再開したい。その思いでいっぱいです。